

公開講演会開催報告（2023年11月16日）

公開講演会「韓国と日本をつなぐ仕事 7 立教大学における朝鮮語教育の模索」

去る2023年11月16日、立教大学池袋キャンパス8号館8303教室において平和・コミュニティ研究機構の主催による公開講演会「韓国と日本をつなぐ仕事 7 立教大学における朝鮮語教育の模索」を開催いたしました。立教大学では1983年以降、朝鮮語の授業がおかれ、1997年からは必修科目の外国語のひとつとなって定着してきました。しかし、その過程やその間の成果と課題について整理して、今後の朝鮮語教育に生かすための作業は十分にできていませんでした。そこで、「韓国と日本をつなぐ仕事」というシリーズでなくてはならないであろう、自分たちの足元を確かめる記録として、今回の講演を企画し、朝鮮語教育の責任者を久しく務めた石坂が僭越ながら報告させていただきました。当日の報告を簡単に紹介いたします。

立教大学で朝鮮語科目が自由科目（自由選択）として設置されたのは1983年度からでした。当時の立教大学はまだ一般教育を一般教育部という学部で担っており、大学院で私の指導教授であった山田昭次先生も日本史が専門で朝鮮語専攻ではありませんでした。しかし、1970年代以降、日本社会の中で研究のためにも交流のためにも朝鮮語を学ばなくてはならないという社会的雰囲気広がり、学内で山田先生が朝鮮語を授業として開講するように訴えたそうです。当時は社会的に韓国への関心も高まり始め、隣国の言語を学ぶべきがない状況は望ましくないということで、NHKに対して朝鮮語の教育番組を作るよう促す動きが出てきました。ところが、その際に「朝鮮語」とするか、「韓国語」とするかが問題となりました。朝鮮語という呼称は朝鮮民主主義人民共和国寄りの考えだ、といった意見が出て状況が複雑化していたのです。学内でも、こうした南北間の政治的争いに巻き込まれるのではないかと憂慮する声があったと聞きましたが、結局「朝鮮語」という科目名となりました。当時はまだ、国と民族、言語が同じ次元では考えられないものだという考え方が深まっておらず、日本社会自身が言語に対するしっかりした考え方を持っていなかったのだと思います。講演でも簡単に申しあげましたが、明治初期まで、日本では「朝鮮語」と「韓語」という言葉が両方使われていました。しかし、歴史的に見て「韓国」という言葉が定着するのはもう少し後のこととなります。500年の長きにわたって続いた朝鮮王朝時代にその文字が作られ、言語としての骨格も定まっていた言語として、「朝鮮語」という言葉は自然な呼称です。現代韓国人びとが自分たちの言葉を韓国語というのは当然です。とはいえ、日本では隣国の南北全体をさして「朝鮮」というのがふさわしいでしょう。現在の日本で天気予報の際に「朝鮮半島」と言っているように、これは歴史的由来に基づいているのです。ちなみに、朝鮮語を早い時期に設置した大学は「朝鮮語」の科目名を選択している場合が多いようです。

最初に立教大学で朝鮮語を担当されたのは早稲田大学の太田益夫先生でした。実は梶井陟先生が最初の候補だったのですが、富山大学に着任されることになり、太田先生にお願いされたのだと、古い資料を見て思い出しました。この当時、まだ4年制大学で朝鮮語の授業を置いている大学は少なかったため、わざわざ聴講登録までして立教の授業に参加された方々もいらしたといえます。私自身も朝鮮語の専門家ではありませんでしたし、朝鮮語を教えることになるとは思っていませんでした。しかし、その当時教えることができる人が少なく、1990年度から朝鮮語中級を担当し、その後は初級も担当することになりました。けれども、まだ当時は自由科目だったため、春先にはそこそこ受講者がいても、年度末にはあまり残っていないという状況が続きました。教員としては悩ましい時期でした。初級を担当してからはわかりやすいテキスト、初年度で学ぶ範囲の設定など、いろいろ悩まされました。

立教で学生たちにきいても、会話ができるようになりたいというのは、昔も今も同じです。当時としては知られていた『はじめてのハングルレッスン』や『朝鮮語を学ぼう』を使い試行錯誤しました。結局立教独自のテキスト作成に進み、パイロット版を経て『フレンドリー・コリアン——楽しく学べる朝鮮語』が2004年度から使われました。その後は『NEW フレンドリー・コリアン——楽しく学べる朝鮮語』をカリキュラム変更に伴って作成、新型コロナウイルス流行後に『プリティ・コリアン』(朝日出版社)にたどり着きました。本文は短く、会話体で覚えやすく、週2回の授業がある1年次ではハングル検定4級程度をめざす、というのが現在の朝鮮語教育の流れとなっています。

その間、学部在学中に交換留学に行くなど学生たちの朝鮮語のスキルは次第に高まっていきました。ソウルの梨花女子大通訳翻訳大学院やその他韓国の大学院に進学する卒業生も増えました。ハングル検定は池袋キャンパスを準会場として2003年以降実施していますが、当初と比べると学生たちのレベルもかなり上がりました。努力して朝鮮語を身につけてくれた学生たちが卒業し、あちこちで活躍してくれているのが、教員としては一番うれしいことです。現在立教で朝鮮語を教えるスタッフにも、3人の卒業生がいます。これから少子化の時代を迎え、大学も一層の工夫をしつつ外国語教育に邁進していくことを期待して、私のつたない報告を終えました。

この日は学内外、卒業生を含めた80人程度の皆さんが参加して下さり、大変うれしく、また心強く思いました。末尾ながら感謝申し上げます。

なお、今回の報告を、これまでの「韓国と日本をつなぐ仕事」の講演の一部と合わせ、本として出版する計画をしております。詳しいことはそこでお読みいただけるかと思っております。

平和・コミュニティ研究機構運営委員／立教大学兼任講師
石坂浩一